

## 子どもの遊びのなかにある学びについての一考察（Ⅱ）

飛 田 隆

### 1. はじめに

本稿は、茨城キリスト教大学紀要「子どもの遊びのなかにある学びについての一考察」（第47号・2013年）を深めることを意図している。また幼稚園教育要領が平成29年告示されたので、そのことについても触れ考えたい、子どもの「遊び」の中にある学びについて幼稚園教育を中心に考えたい。

先の考察では幼稚園で「子どもたちの遊びのなかにある学び」について解説し、教員の役割や環境について考え方を提示した。

本稿ではそのことを深め幼稚園教育の中で教員は環境を広く捉える必要性について触れ教員の「遊びの中にある学び」を意識した計画の重要性について解説し、環境を意識する大切さについても考えたい。

平成20年告示の幼稚園教育要領には第1章総則第1幼稚園教育の基本の2に遊びについて以下のような記載がある。

「2 幼児の自発的な活動としての遊びは、心身の調和のとれた発達の基礎を培う重要な学習であることを考慮して、遊びを通しての指導を中心として第2章に示すねらいが総合的に達成されるようにすること。」<sup>(1)</sup>（傍線筆者）そして現在の幼稚園教育要領（平成29年告示）も変更なく同じく記載されている。

幼児の「自発的な活動としての遊び」を導くためには教員は子どもに興味や関心を持たせるような環境を意識することも大切になる。もちろん子ども自身が自らいろいろな物に興味や関心を示し自発的な活動としての遊びを始めることもあると思うが、そのことのみにかかせるだけでは興味や関心が偏ることも考えられる。

文部科学省「幼稚園教育要領解説」（平成30年3月）によれば幼児期の特性と幼稚園教育の役割について以下のように解説がなされている。

#### 第2節 幼児期の特性と幼稚園教育の役割

##### ③興味や関心

生活の場の広がりや対人間関係の広がりに伴って、幼児の興味や関心は生活の中で様々な対象に向けられて広がっていく。

生活の場が家庭から地域、幼稚園へと広がるにつれて、幼児は、興味や関心を抱き、好奇心や探求心を呼び起こされるような様々な事物や現象に出会うことになる。そのようなものに対する興味や関心は、他の幼児や教師などと感動を共有したり、共にその対象に関わって活動を展開したりすることによって広げられ、高められていく。また、一人では興味や関心をもたなかった対象に対しても他の幼児に接することによ

であるいは、教師の援助などによって、自分もそれに興味や関心をもつようになる。このような興味や関心は、その対象と十分にに関わり合い、好奇心や探求心を満足させながら、自分でよく見たり、取り扱ったりすることにより、更に高まり、思考力の基礎を培っていくので、幼児が様々な対象と十分にに関わり合えるようにすることが大切である。また、他の幼児や教師などの親しみをもっている大人の行動を模倣し、同じようなことをやってみようとしたりすることが多い。したがって、自然や出来事などの様々な対象へ幼児の興味や関心を広げるためには、他の幼児の存在や教師の言動が重要な意味をもつことになる。<sup>(2)</sup>

幼児は幼稚園に通園することで興味や関心が広がることも期待されると思うが、何よりも大切なのは教員の役割ではないかと考える。

幼稚園の環境は原則的には全て教員の意図によって構成されているが、日々の教育の中で教員の考えを計画作成することで、より効果的に子どもの興味や関心を広げていくことが実践されていくと理解している。

今回改訂された幼稚園教育要領（平成29年告示）の前文には以下のように示されている。関連するところを抜粋する「これからの幼稚園には、学校教育の始まりとして、こうした教育の目的及び目標の達成を目指しつつ、一人一人の幼児が、将来、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値ある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにするための基礎を培うことが求められる。このために必要な教育の在り方を具体化するのが、各幼稚園において教育の内容等を組織的かつ計画的に組み立てた教育課程である。」<sup>(3)</sup> ここで教育課程の重要性が指摘されている。

子どもの興味や関心を広げるために教員の役割は大きいですが、単に教員の思い付きや好みのような教育では効果は少ないと思う。そのようなことがないように各幼稚園において教育課程を作成するときに全員の教員が編成に関わるのが大切だと考える。

教育課程を作成することで「子どもたちの遊びのなかにある学び」につながる子どもの多様な興味や関心を広げることができると考えている。

子ども達の興味や関心を広げた中でこそより多様な「学び」があるのではないかと考えている。

## 2. 教育課程

教育課程は子どもの「自発的な活動」を制限することにつながるのか、教育課程は教員が作成したうえでその計画に基づいて教育を行うことが想定されているので、教育課程を作成するということは教員指導の教育になるのではないかと懸念が持たれることは想像できる。

このことは教育課程に基づいた指導計画をどう捉えるかによるところが大きいと考える。指導計画を絶対的なものとして捉え子どもたちを指導計画に合わせる事が正しい教育だと考えてしまうと確かに子どもの「自発的な活動」を制限することになってしまうと考えられる。

しかしこのことは指導計画を作成するかどうかの問題でなく指導計画を教員がどのように捉えているのかの問題だと考えている。

指導計画はあくまで「案」であり子どもの現実の姿に合わせて柔軟に捉えることが大切になる。「子どもの自主性・主体性に基づく保育を行なおうとすればするほど、いつどのような事態が生ずるかなかなか予測できません。子どもの興味・関心が保育者の見通しと一致するとは限らないからです。『幼稚園教育指導書増補版』（平成元年文部省）でも、【どのように綿密に考えられた計画であっても、それは単なる予想であって、現実の幼児の生活はそのとおりに展開するものではない。特に、幼稚園教育の基本は環境を通して行うものであり、環境に幼児がかかわって生まれる活動は様ではない。時には、教師の予想とは違った展開をすることも往々にして見られる】と述べています。」<sup>(4)</sup>つまり指導計画を作成するから子どもの行動などを制限したり教員の考え通りに動かしたりすることになるのではなく教員の指導計画の捉え方によって「自発的な活動」を制限することにつながることを理解しておく必要がある。また教育課程を作成するときに考えておかなければならないことがある。

幼稚園教育要領（平成29年告示）には以下のように記されている。

### 第3 教育課程の役割と編成等

#### 4 教育課程の編成上の留意事項

教育課程の編成に当たっては、次の事項に留意するものとする。

- (1) 幼児の生活は、入園当初の一人一人の遊びや教師の触れ合いを通して幼稚園生活に親しみ、安定していく時期から、他の幼児との関わりの中で幼児の主体的な活動が深まり、幼児が互いに必要な存在であることを認識するようになり、やがて幼児同士や学級全体で目的をもって協同して幼稚園生活を展開し、深めていく時期などに至るまでの課程を様々に経ながら広げられていくものであることを考慮し、活動がそれぞれの時期にふさわしく展開されるようにすること。
- (2) 入園当初、特に3歳児の入園については、家庭との連携を緊密にし、生活のリズムや安全面に十分に配慮すること。また、満3歳児については、学年の途中から入園することを考慮し、幼児が安心して幼稚園生活を過ごすことができるよう配慮すること。
- (3) 幼稚園生活が幼児にとって安全なものとなるよう、教職員による協力体制の下、幼児の主体的な活動を大切にしつつ、園庭や園舎などの環境の配慮や指導の工夫を行うこと。<sup>(5)</sup>

教育課程の作成については最終的には園長の責任の下で編成されるが、その作成過程には教員全員がかかわることが大切になる。教育課程の作成するときに教員一人一人の考え方や思いを教員同士で伝え合う中で教員間の合意ができるのではないかと考える。

各教員の意思疎通を図ることで園としての考え方や理念等についても改めて考える機会になり園の目指す教育や子ども達がどのように育ってほしいのか共通理解を再確認できることで子どもに関わるときの指針にもなると考える。

教育課程を作成することで一人一人の教員が子ども達の興味や関心を捉えながらも安易に子どもの要求に流されることなく子どもにとっての発達課題やその時期に必要な技術を獲得するために必要な経験や学びの機会を逃すことがなくなると考えられる。また園外保育や行事なども計画的に幅広く考えることで多様な経験・体験につながることも期待でき地域の方との触れ合う機会も増えると考えられる。

教育課程は一度作成すればそれで終わりということではなく、子どもの実態に合わせて適宜見直しが必要になる。

教育課程に基づいた指導計画がいかによくできていても実際の子どもの教育においては教員が計画した通りに子どもの興味や関心が全く同じということではなくその時の状況によっては子どもの反応が違うこともある。

毎日の幼稚園生活が終了した後に評価や反省をすることにより、計画と現実とのずれが生じていることに気付くと思う、そのずれを丁寧に見直すことで、子どもの実態が見えてくることも考えられる。

教育課程の見直しを必要に応じて行うことで子どもを教員が考えた計画に合わせるのではなく、子どもの「自発的な活動としての遊び」を促す教育につながっていく、このことを通して子どもの興味や関心の幅も計画的に広げられるのではないかと考えている。

### 3. 環境を意識する

今回改訂された幼稚園教育要領（平成29年告示）の前文の最後には以下のような記述がある。

「幼児の自発的な活動としての遊びを生み出すために必要な環境を整え、一人一人の資質・能力を育んでいくことは、教職員をはじめとする幼稚園関係者はもとより、家庭や地域の人々も含め、様々な立場から幼児や幼稚園に関わる全ての大人に期待される役割である。家庭との緊密な連携の下、小学校以降の教育や生涯にわたる学習とのつながりを見通しながら、幼児の自発的な活動としての遊びを通しての総合的な指導をする際に広く活用されるものとなることを期待して、ここに幼稚園教育要領を定める。」<sup>(6)</sup> 子どもが自ら遊びだすことを尊重することは大切だが、そのことのみにならざるに良いということではないことがわかる。幼稚園の教職員も保護者も地域の人々も含めて子ども興味や関心をどう広げていくかも大切になる。子ども興味や関心を広げることを意識しておかなければ子どもの遊びは偏ったものになることも考えられる。実際の事例ではないが、考える手かかりとして例をあげたい。

例えば幼稚園で子どもの自発的な遊びを大切にするという方針の下、子どもの好きな遊びを何時でもまかせておいたとしたらどうなるか考えてみればわかると思う。極端な例の方がよりわかりやすいと思うので、あえてありえないような例で考えたい。

A君はブロックが大好きで、幼稚園に来るとブロックで遊びだし一日中遊んでいる。教員も「自発的な活動としての遊び」として認めその行動を制限することなく自由にしていた。A君は毎日ブロックで遊び年長の三学期の頃には大人でも難しいような精巧なお城や街並みを再現して教員を驚かした。しかし、折り紙1枚折ったこともなく歌を1曲も歌わず、鬼ごっこもかくれんぼもすることなく卒園した。

B子ちゃんは折り紙が大好きで毎日いろいろな折り紙に挑戦して過ごした。教員も「自発的な活動としての遊び」として認めその行動を制限することなく自由をしていた。やがてB子ちゃんは折り紙の紙だけでなく包装紙や時にはカレンダーのようなやや厚みのある紙にも挑戦して年長の三学期の頃には大人でも難しいような精巧な折り紙を折り教員を驚かした。しかし絵本を読むこともなく歌を1曲も歌わず、鬼ごっこもかくれんぼもすることなく卒園した。

C君はとても元気な子どもで体を動かすことが大好きで幼稚園に来るとすぐに外に出て遊びだしゲーム、駆け足、固定遊具での遊びを一日中して遊んでいた。雨の日でも遊戯室で体を使う遊びをしていた。教員も「自発的な活動としての遊び」として認めその行動を制限することなく自由をしていた。やがてC君は日焼けして筋肉質の丈夫な体に成長し年長の三学期まで一日も休むことなく登園した。しかし、折り紙1枚折ったこともなく歌を1曲も歌わず、先生の読む紙芝居や絵本を一度も聞くことがなく卒園した。

ここで例に挙げたA君、B子ちゃんC君は確かに「自発的な活動としての遊び」をしているがこれで良いのだろうか、幼稚園教育要領（平成29年告示）の第1章の総則は以下のように記述されている。

## 第1章 総則

### 第1 幼稚園教育の基本

幼児期の教育は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものであり、幼稚園教育は、学校教育法に規定する目的及び目標を達成するため、幼児期の特性を踏まえ、環境を通して行うものであることを基本とする。

このため教師は、幼児との信頼関係を十分に築き、幼児が身近な環境に主体的に関わり、環境との関わり方や意味に気づき、これらを取り込もうとして、試行錯誤したり、考えたりするようになる幼児期の教育における見方・考え方を生かし、幼児と共によりよい教育環境を創造するように努めるものとする。これらを踏まえ、次に示す事項を重視して教育を行わなければならない。

- 1 幼児は安定した情緒の下で自己を十分に発揮することにより発達に必要な体験を得ていくものであることを考慮して、幼児の主体的な活動を促し、幼児期にふさわしい生活が展開されるようにすること。
- 2 幼児の自発的な活動としての遊びは、心身の調和のとれた発達の基礎を培う重要な学習であることを考慮して、遊びを通しての指導を中心として第2章に示すねらいが総合的に達成されるようにすること。
- 3 幼児の発達は、心身の諸側面が相互に関連し合い、多様な経過をたどって成し遂げられていくものであること、また、幼児の生活経験がそれぞれ異なることなどを考慮して、幼児一人一人の特性に応じ、発達の課題に即した指導を行うようにすること。

その際、教師は、幼児の主体的な活動が確保されるよう幼児一人一人の行動の理解と予想に基づき、計画的に環境を構成しなければならない。この場合において、教師は、幼児と人やものとの関わりが重要であることを踏まえ、教材を工夫し、物的・空



間的環境を構成しなければならない。また、幼児一人一人の活動の場面に応じて、様々な役割を果たし、その活動を豊かにしなければならない。<sup>(7)</sup>

上記の幼稚園教育の基本を踏まえ先の例から考えたい。A君はブロックが大好きで、幼稚園に来るとブロックで遊びだし一日中遊んでいる。ここで教員はどのように関わるのが良いのか考えたい。例えば「幼児との信頼関係を十分に築き」を意識して一緒に遊ぶ中で信頼関係を築き「教師は、幼児と人やものとの関わりが重要であることを踏まえ、教材を工夫し、物的・空間的環境を構成しなければならない。」一緒に遊ぶことで近くにいる子どもたちも誘いA君と他の子どもたちと一緒に遊ばせることも可能になる。他の子どもがブロック遊びに入ることによって遊びが広がったり発想が広がったりすることも考えられる。例えばブロックで街並みを再現した時に歯磨きの箱をつなげて電車に見立てたり、石鹸の箱をバスに見立てたりする子どもがいることも考えられる。こうすることでブロックのみで遊んでいたところに箱という素材が加わることで遊びの幅が広がり時にはハサミを使って形を変えたり、セロテープを使って箱をつないだりしてより多彩な遊びが生まれることも予想される。

B子ちゃんは折り紙が大好きで毎日いろいろな折り紙に挑戦している。この例もA君の事例同じように教員と一緒に遊ぶことで他の子どもたちも折り紙遊びに誘うことで遊びが広がるようにすることができる。例えばカレンダーなどの厚めの紙で橋を作りA君たちが作っている街並みに橋をおかせてもらうことも考えられる。また今まで作りたい折り紙をその街の中のお店屋さんになり折り紙で作った作品を売るようなこともできると考えられる。B子ちゃんは他の子どもと売り買いのやり取りをすることで自分が作りたい折り紙を作るだけでなく友達が欲しい折り紙を作ることに興味や関心が広がることもあると考える。

C君はとても元気な子どもで体を動かすことが大好きで幼稚園に来るとすぐに外に出て遊びだしゲーム、駆け足、固定遊具での遊びを一日中して遊んでいる。A君やB子ちゃんの例と同じように教員と一緒に遊ぶことで他の子どもたちもC君の遊びに誘うことができるのではないと思う。例えば雨の日などはC君も遊戯室で遊ぶのでこの時にB子ちゃんに紙飛行機を作ってもらいC君も含めた子ども達で飛行機飛ばしをして遊ぶような事を教員が計画してC君に折り紙への興味や関心を広げることできるのではないと思う。体を動かすことが好きで折り紙があることさえ意識できなかったC君が折り紙を使つての飛行機飛ばしを体験することで折り紙にも目が向き、一緒に遊んだ子ども達にも意識が向くと考えられる。

考える手がかりとして極端な例を提示して考えたが現実の幼稚園教育の中でも教員が環境を意識することで子どもの興味や関心が広がり、そのことが「自発的な活動としての遊び」の幅が広がり「子どもたちの遊びのなかにある学び」に繋がっていくのだと考える。ここで注意が必要なのが教師指導がたの一方的な指導計画ではない事を考えておくことが大切になる。文部科学省「幼稚園教育要領解説」（平成30年3月）によれば以下のように解説されている。

## （2）幼児の主体性と教師の意図

このような環境を通して行う教育は、幼児の主体性と教師の意図がバランスよく絡み合って成り立つものである。

幼稚園教育が目指しているものは、幼児が一つ一つの活動を効率よく進めるようになることではなく、幼児が自ら周囲に働き掛けてその幼児なりに試行錯誤を繰り返す、自ら発達に必要なものを獲得しようとするようになることである。このような幼児の姿は、いろいろな活動を教師が計画したとおりに、全てを行わせることにより育てられるものではない。幼児が自ら周囲の環境に働き掛けて様々な活動を生み出し、それが幼児の意識や必要感、あるいは興味などによって連続性を保ちながら展開されることを通して育てられていくものである。

つまり、教師指導の一方的な保育の展開ではなく、一人一人の幼児が教師の援助の下で主体性を発揮して活動を展開していくことができるような幼児の立場に立った保育の展開である。活動の主体は幼児であり、教師は活動が生まれやすく、展開しやすいように意図をもつて環境を構成していく。もとより、ここでいう環境とは物的な環境だけでなく、教師や友達との関わりを含めた状況全てである。幼児は、このような状況が確保されて初めて十分に自己を発揮し、健やかに発達していくことができるのである。

その際、教師には、常に日々の幼児の生活する姿を捉えることが求められる。教師は、幼児が何に関心を抱いているのか、何に意欲的に取り組んでいるのか、あるいは取り組もうとしているのか、行き詰っているのかなどを捉える必要があり、その捉えた姿から、幼児の生活や発達を見通して指導の計画を立てることになる。すなわち、今幼児が取り組んでいることはその幼児にとって十分できることなのか、新たな活動を生み出すことができることなのか、これまでの生活の流れや幼児の意識の流れを考慮して指導計画を立てることになる。しかしどんなに幼児の願いを受け止め、工夫して計画しても、その中で幼児が何を体験するかは幼児の活動にゆだねるばかりではない場合もある。しかし、『幼児をただ遊ばせている』だけでは教育は成り立たない。幼児をただ遊ばせているだけでは、幼児の主体的な活動を促すことにはならないからである。（第1章 第4節 3 指導計画作成上の留意事項 （7）教師の役割116頁を参照）一人一人の幼児に今どのような体験が必要なのだろうかと考え、そのためにはどうしたらよいかを常に工夫し、日々の保育に取り組んでいかなければならない。<sup>(8)</sup>

解説の中で触れられているように教師が指導する一方的な計画ではなく、一人一人の幼児が主体的に活動できるような幼児の立場に立った保育の展開が求められている。活動の中心は幼児であり、教師は子どもの興味や関心を広げ新たな活動が生まれ遊びが展開しやすいように意図をもつて環境を構成し、教材の準備等に努めることが大切になる。ここでいう環境とは物的な環境だけでなく、教師や友達との関わりを含めた状況全てである。幼児は、このような状況が確保されて初めて十分に自己を発揮し、健やかに発達していくことができる。「子どもたちの遊びのなかにある学び」を実現するためには単に子どものやり

たい遊びのみにまかせておくことではなく、以上の事を教師は意識する必要がある。

#### 4. 行事を意識する

幼稚園生活は毎日が子ども達にとって必ずしも刺激的ではないと思っている。また教員もそのようなことばかりは考えていないと思う。幼稚園は子どもにとってなるべくわかりやすい生活環境を考えているのではないかと思える。そうするとあまり変化がないように環境を整えることになるのではないかと考える。また幼稚園生活に慣れてくると子どもたちの遊びも繰り返しになることも多く、友達も毎日変わって違う友達と遊ぶというよりは、顔なじみの友達と昨日していた遊びの続きをすることが多くなるのではないかと予想している。このことは別に悪いことではなく、子ども達が安心して幼稚園生活をおくるのには大切なことではないかと考えている。

しかしながら変化のない生活環境だけになってしまうと子どもたちに多様な興味や関心を広げるという「ねらい」からすると不都合なこともでてくる。

そこで各幼稚園が月ごとに様々な行事を行っていると考えられるので行事を意識することでより子どもたちの興味や関心を広げることにつながると考えられることを提案したい。

ここでは多くの幼稚園が年間計画に入れていると考えられる代表的な行事について考えてみたい。

4月はこの園でも入園式が行われると考えている。「入園前には憧れや不安、そして期待をもっていた幼稚園・保育所に入る第1日目なので、子ども達も緊張し、いつもと違うようすになることが多い。しかし、この入園式を体験することによって、子どもはこの園の一員になった喜び、そして明日からの園生活に向けて大きな期待をもつようになる。同時に友達や保育者と楽しく生活できるか、多少の不安も感じている。また、園の固定遊具や教材などの環境に対しても興味心身になる。これらのさまざまな気持ちを味わうことが、大きな成長につながっていく。特に、保護者から離れる自立心や1人で活動する責任感も育っていくと思われる。」<sup>9)</sup> 子どもにとっては初めての式典になり緊張する子や不安になることもあると思うが、教員はなるべく子どもの視点にたったの入園式を子どもの興味や関心を広げる機会にするとということも考えて計画することで入園式の内容や子どもの隊形等も子どもの負担を減らし、子どもの不安感も軽減できると考えている。

例えば子どものすぐ後ろに保護者の席を設ける。入場退場は並ばせないで保護者と手をつないで行う。在園児との対面は在園児の挨拶ではなく歌のプレゼントにする。また入園式の時間もなるべく短くするために園長の挨拶やPTA会長の挨拶はなしにして紹介だけにするか、短くする。飽きた子どもが遊べるスペースを作っておくことで子どもの負担を減らせ、そのうえで子どもたちは在園児がたくさんいることやいろいろな教員と出会い、幼稚園の遊具なども見ることができ幼稚園への興味や関心が広げられるのではないかと考えられる。

10月の運動会は国民的な行事で小学校、中学校、地域でも行われると思う。『運動会のいちばんのねらいは、なんといっても身体の諸能力の発達である。走る、投げる、引く、飛び降りる、くぐるなど幅広い種目を取り入れることで伸ばせる運動機能・能力はたくさんある。人間のうごきの基本は36程度あるといわれているが、水の中のもの以外は運動会の



種目にほとんど含まれる。また、例えば走る競技には、自分の順番を待つ、「ヨーイ」で構えてまだスタートしない、「ドン」の合図があった時に素早く前に走る、トラックの中を横切って近道で走らないなど決まりがある。こんなことができるようになった姿も、ぜひ保護者に見せたい。運動会はクラスごと、グループごとにする競技もある。そうなる結果にこだわる姿も出てくる。また勝ち負けがつけられることで一喜一憂し、勝とうとする姿も見られる。5歳くらいからは、行事の運営にも参加できる。ゴールテープを持ったり、年齢の低い子を誘導したり、その役割を意識して行う。さらに運動会の入場門の装飾を考えたり、競技の音楽を保育者と模索したりという事前の活動もある。特に年長児の行事はそうした意味で総合的なものになってくる。』<sup>(10)</sup> 運動会という行事はどの幼稚園にとっても日頃の教育の成果を保護者や地域の方、来年度入園予定の子どもと保護者に見せる機会の意味合いもありどうしてもよく見せたい思いや考えになることも仕方がない部分もあるが、だからこそ子どもの視点で運動会を捉えるということも大切ではないかと考えている。

例えば子どもたちが普段遊んでくることを運動会の競技内容にしたり、小学校、中学校、や地域の運動会では計画しないような種目も考えてほしい、コマ回しが流行っている幼稚園ではコマ回しを種目にいれたり、紙飛行機が得意な子どもたちがいれば飛行機飛ばしを考えても良いのではないと思う。幼稚園の運動会は普段の子どもたちの遊びの中から種目を選び普段の幼稚園での遊びがそのまま運動会になることで入場行進の練習だとか見せるためだけのダンスや器械体操などのようなものはなくなるのではないかと考える。

運動会は地域の方も参加しやすい行事のひとつでないかと思うので地域のお年寄りのところに年長児がプレゼントを持ってかけていき、お年寄がいる場所に行ってからプレゼントを渡して一緒に歩いてゴールするようなことは考えられないだろうか、幼稚園は地域の中で多くの大人に見守られていると思うので運動会などの行事では地域の方との触れ合いを通して子ども達にも地域の方への関心が広がることにつながると思う。

普段の教育の中では取り組めないようなことも行事の中で取り組むことにより子どもの興味や関心を広げることにつながることを意識して計画を立てることは大切だと考える。

## 5. おわりに

前回の茨城キリスト教大学紀要「子どもの遊びのなかにある学びについての一考察」(第47号・2013年)では「子どもの遊びのなかにある学びについて」自由遊びと一斉保育(設定保育と呼ばれることもある)という視点から考えた。また一斉保育での子どもの学びと教員の役割、自由保育での子どもの学びと教員の役割ということについても論述した。

今回は子どもの興味や関心を広げるために教員の役割は大きい、単に教員の思い付きや好みのような教育では効果は少ないと考え考察した。そのようなことがないように教員が指導計画を考えるとときに各幼稚園において全体的な計画を作成するときに全員の教員が編成に関わり教育課程を作成することが大切だと考えた。

教育課程を作成することで「子どもたちの遊びのなかにある学び」につながる子どもの多様な興味や関心を広げることができると考えている。

子ども達の興味や関心を広げた中でこそより多様な「学び」があるのではないかと考え

ている。

まだ論じられていないところは今後の課題としたい。

#### 引用文献

1. 文部科学省 幼稚園教育要領（平成20年告示） フレーベル館 4 頁
2. 文部科学省 幼稚園教育要領解説（平成30年3月） 12, 13頁
3. 文部科学省 幼稚園教育要領（平成29年告示） フレーベル館 3 頁
4. 林秀雄 編「豊かな保育をめざす 教育課程・保育課程〔第2版〕」株式会社 みらい 2011年 12頁
5. 文部科学省 幼稚園教育要領（平成29年告示） フレーベル館 8, 9 頁
6. 文部科学省 幼稚園教育要領（平成29年告示） フレーベル館 4 頁
7. 文部科学省 幼稚園教育要領（平成29年告示） フレーベル館 5 頁
8. 文部科学省 幼稚園教育要領解説（平成30年3月） 29, 30頁
9. 友松浩志 編集委員長 「保育実践事典」公益財団法人幼少年教育研究所 2016年 224頁
10. 同上 228頁

## Consideration of Learning in the Play of Children II

Takashi Tobita

This thesis is to deepen “Consideration of Learning in the Play of Children” (2013). In ‘2013 study’ I considered about children’s learning through play, teachers’ role and environment.

To deepen and widen children’s learning through play, I suggest two points. One is that teachers should take environment widely and the other is that they should always think about whole kindergarten education when they plan curriculum. I also refer to importance of conveying children that they learn in their play.

One of important points of view in making curriculum is how to expand children’s concern and interest. When teachers consciously lead children to broader field of concern and interest, the kinds of children’s play become abundant and their appetite for knowledge gets impulse. Then children start to approach something new with their new knowledge and experiences. Children’s play on their own initiative is important, of course, but when teachers play their part with well-planned curriculum in the kindergarten, play becomes wider and learning becomes deeper. Some good examples are shown in this thesis.